

特別講演

1. 局所副腎ステロイド剤の基礎と臨床

水島 裕 (聖マリアンナ医大、第一内科)

ステロイド剤の最近の進歩は、ステロイド剤自体によるものではなく、その分布、代謝に特徴があり、それゆえ局所にむく薬剤、持続型のもの、副作用の少ないものなどがあることであろう。それらを表1に示した。

表1 ステロイド剤の種類の特徴

Prednisolone	free	
"	acetate	<TBA 脂溶性、局所用、持続型
"	succinate	水溶性、高濃度
Beclomethasone	dipropionate	局所親和性、代謝物は不活性型

局所投与であってもステロイド剤自体の薬理作用は複雑であり、その臨床使用にあたっては、基礎的知識を身につけておいた方がいろいろと便利である。ステロイド剤の薬理作用は多岐に渡るが、局所抗炎症、アレルギー作用を考えた場合、もっとも重要な作用点は広義の白血球に対する作用である。そのまとめを表2に示した。

表2 ステロイド剤の白血球に対する作用

	移行	機能
リンパ球	感受性 血中→骨髄など T μ >T>B	一般に非感受性 MLR 一部のCML 抗原によるprolif } 感
マクロファージ	高感受性 血中→ 炎症巣への移行 DH	感受性 MIF 殺菌 遊走
好中球	感受性 炎症巣への移行 粘着性の変化	非感受性 貧食 消化 遊走

つぎにステロイド剤の作用は、ヒトとステロイド感受性の動物とはかなり異なるものである。ステロイド剤のヒトにおける作用で抑制されやすいもの、されにくいものを表3に示した。このようなことも臨床上の使用に際し役に立つものであろう。

表3 ステロイド剤の作用 (ヒト in vivo)

抑制され易いもの	抑制され難いもの
Mixed leukocyte reaction proliferation	T cell mediated cytotoxicity ? (MLR)
Delayed hypersensitivity reaction	ADCC
Inflammatory cell accumulation	DH T cell proliferation
	Antibody production

このほか、局所ステロイド療法では、局所での効果、局所での副作用と全身性の副作用が問題になる。これらは、動物およびヒトで表4に示したように評価できる。

表4 局所ステロイド剤の有用性

	局所効果	局所副作用	全身作用
ヒト	血管収縮、DBT	皮膚萎縮、皮膚炎	170HCS、コーチゾール
動物	トネリー法	皮膚萎縮	胸腺重量